

「鏡のアート(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

鏡というと、理科の教師の場合、平面鏡しか思い浮かばない。凹面鏡や凸面鏡もあるが、高価だし子どもに馴染みが薄い。しかし図工の先生は発想が柔軟だ。文字通り「柔軟な鏡」も用意していた。



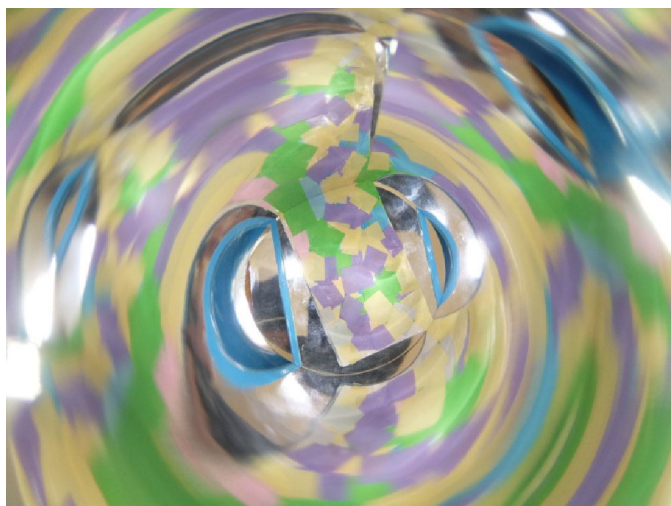
写真の下方のものは、理科室のある実験用の平面鏡である。上方のものが「柔軟な鏡」だ。アルミ蒸着シートをクリアコートしたようなもので、3次元的にフレキシブルに変形させることができる。定規で言えば、「自在雲型定規」のようなものである。



子どもたちは、最初自分の顔を映して遊んでいた。曲面のつくり方によって、顔が縦に伸びたり、横に伸びたり、顔の半分だけに変形したりと、面白がってゲラゲラ笑っていた。この不思議な鏡を使って、切り絵カードを映すと、平面鏡では創れない、面白い造形が見られるようになる。



「柔軟な鏡」は、筒のように丸めることも可能だ。写真はU字型に曲げた鏡を上から見たところ。児童機のまっすぐな模様が、同心円状に変形して見える。



切り絵作品を机の上に置いて、その上に筒状にした鏡を置くと、こんなふうに見える。一人が筒を持って、一人がカードを回転させると、まるで万華鏡のように実にカラフルな造形が見られる。

図工用の「柔軟な鏡」であるが、理科の授業でもどこかに使えるような気がする。

【子どもの絵日記から】

「図工の時間に、かがみを使った遊びをしました。まっすぐなかがみをなんまいもおくと、絵がむげんにうつりました。ぐにゃぐにゃの鏡は、もっとおもしろくて、きり絵がいろんな形に変形しました。自分の顔もへんな顔になりました。とくにおもしろかったのが、かがみをつつみたいにもるめて、上からのぞくと、きり絵やけしきが、ぐるぐるまわって、ゆう園地にいるみたいな気持ちになりました。このかがみを売っていたら、一まいほしいです。」